

C-14 ニットの縫製に関する研究 (第5報) フラウス原型のゆるみ分量について

立正女大家政 松田聡子 実践女大家政 平岡和香子 恵泉女短大 藤井香代
群馬大教育 高木貴美子 東京学芸大教育 石もつ子 ○森谷多恵子

目的 前回はニットの縫製に関して基礎的な研究を報告したが、今回は実際にフラウスを製作する場合のゆるみ分量について外観、着ごこち、動作の上から検討した。

実験材料・方法 市販の2種類(綿100%)ポリエステル(100%)のニットを選び、ゆるみ分量を布帛フラウスと同量で製作着用したところ外観、機能上からゆるみ分量が適当でないことが認められたので、バストのゆるみ分量を0、2、4、6cm、アームホールのゆるみ分量0、1、2、3cmの4種とし、被験者は大、中、小の3体型を選び計24着のフラウスを製作し、着用して直立正常位、上肢の上挙、前屈身など動作時の背巾およびW.L.のフリ上かり等を測定した。また着用前と着用後の伸びおよび回復を測定した。測定は24時間おきに3回、動作時の測定を行い、伸びおよび回復状況から更に6時間の継続着用を洗濯前後に行い、比較検討した。

結果 Bustのゆるみが大になると、伸長回復はよい傾向がみられたが、ゆるみ分量4cmと6cmの間には大差なく、裾のフリ上かりはゆるみ分量が小さくなると、身体によく馴染む関係から、床上市法は少なかった。外観上からは、ゆるみ0cmの場合、綿は身体によく馴染みフィットしているが、ポリエステルは横じわが多く発生した。着心地としては、双方ともに、袖下、脇回りかきつい感じであった。従って、以上の結果から、ゆるみ分量としては、2~4cm程度が適当であろうと考える。